

寺内寿一元帥と 安宅彌吉氏

加賀本昭雄 陸自66

安宅彌吉の御孫、光雄氏から、寺内寿一氏から安宅彌吉氏宛の2通の書簡を託されました。

軍のエリートと関西財界の重鎮、2人の出逢いと親交は、寺内元帥が大坂第4師団長（陸軍中将）在任時（昭和7年〜9年）の間で、ゴーストツブ事件（昭和8年）と云う事案もあったが、この書簡から大いに親交を深められたことが推察されます。書簡が交わされたのは、支那事変下、元帥が北支那方面軍司令官（陸軍大将）在任時の昭和13年のことです。

さて、その内容は、

【書簡1（昭和13年3月9日付）】

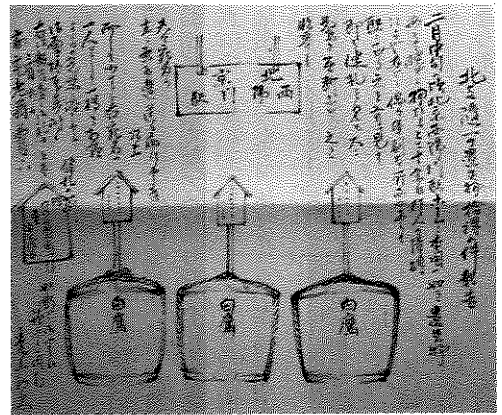
安宅彌吉氏が北支派遣軍の諸兵団長に贈った日本酒（白鷹）の菰樽が、どう云う経緯かわからないが、北京駅頭に「遺失物」として放置され、「行人の障害になつてゐる」との報告を受けた寺内司令官は直ちに回収を命じ、それぞれ兵団長に送り届けると共に、自ら宛の菰樽も受け取ったという札状である。

部下に書かせても良い内容にも拘わらず、自ら筆を執り、菰樽の並んだ面を添え、彌吉氏に面白さや満足感すら感じさせるまでの深い配慮を感じさせる書簡である。（写真1）

【書簡2（昭和13年7月17日）】
彌吉氏の返書は残っていないが、書簡1に対し何らかの返書を為したものである。それを讀んでの書簡である。

寺内寿一（三月九日）とあり、書簡1の日にちと一致しており、寺内元帥が差出人であることが確認できる。

写真1（書簡1）



菰樽を受け取った喜びを、達磨さんの画と「大喝一声」と云うさらに諧謔の度合いが強まった内容になつてゐる。その達磨の画の線は、美術の専門家から見ても感心する水準のものであるようである。

また、自らを「禿山和尚」「禿山老衲（とくざんろうのう）」と呼び、彌吉氏を「安宅大禿先生」と称するなど親しみを込め、単なる儀礼的な札状ではなく、時間を費やして自筆で墨書する様な好ましい人間的・感情的交流が成立していたのでしょう。（写真2・3）

昭和6年、寺内寿一氏の師団長着任の前年、大阪城天守閣復興のために集

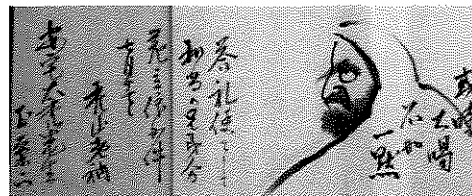
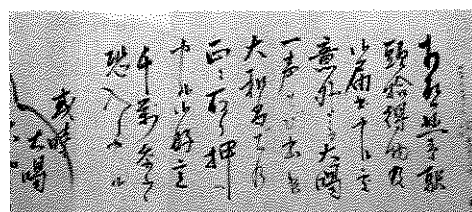
められた大阪市民からの寄付金約150万円の内、実に半分以上の約80万円を投じて大阪第4師団司令部庁舎（現MIRAIZA OSAKA JCO）が新築されており、彌吉氏の尽力も大いにあつたものと思われれます。想像を逞しくすれば、新庁舎の師団長室が初めての出逢いの場所だったかもしれない。

清酒「白鷹」は灘五郷の特産物で、地場の特産物を送ることで、外地に派遣されていた兵隊さんを慰撫激励する意図を含めた贈り物と推測されます。

安宅彌吉氏を初めてとする当時の大阪財界人の国を思う心意気や推して知るべし！！

写真2（書簡2右半分）

写真3（書簡2左半分）



軍を代表して北京にあった寺内寿一氏と、民間人として大阪財界を牽引しなければならなかった安宅彌吉氏とそれぞれ立場は異なるが、互いの立場に立脚しつつ相手を尊重し、良好な関係を構築しようとする強い意志と希望が、そのやり取りの中に見て取れるようです。

別の言葉でいえば、寺内寿一元帥は、大阪第4師団長時代には関西財界人と個人レベルの友好関係を築くことに努め、北支派遣軍司令官時代には北京に於いて内地との連携を保つという仕事を懸命且つ最高級のレベルで遂行されたのではあるまいか。そのような姿勢を読み取ることの出来る書簡2通ではないかと考えます。

寺内寿一氏は昭和21年6月12日、安宅彌吉氏は昭和24年2月5日それぞれ逝去されました。今は、あの世で禿げ頭を突き合わせ、杯を傾けて居られることでしょうか。

なお、安宅光雄氏のご希望通り原書簡は、駐屯地司令ほか関係者のご配慮により、所縁の山口市にある陸上自衛隊山口駐屯地資料館「防長尚武館・寺内両元帥展示室(第2展示室)」に展示・保存し、寺内寿一元帥の人柄の一端を広く知ってもらおうことになりました。山口地区に御出の節は是非ご覧頂ければ幸甚に存じます。